



発行
一般社団法人徳洲会
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階
TEL: 03-3262-3133

制作
一般社団法人徳洲会 広報部
TEL: 03-3288-5580 FAX: 03-3263-8125
Email: news@tokushukai.jp



ALL LIVING BEINGS ARE CREATED EQUAL

徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS



No. 1534



武蔵野徳洲会病院（東京都）は日本栄養治療学会（JSPEN）が主催した「第3回患者さんのための見た目にも美味しい病院食コンテスト」でグランプリを獲得、第1回から3連続グランプリという快挙を達成した。2月13日から2日間、「Innovation（変革）」をテーマに横浜市内で開催された第41回JSPEN学術集会で、同院を代表して土屋輝幸・栄養管理室副室長がグランプリ講演を行った。同学術集会では徳洲会グループから26演題の発表があった。

学術集会では徳洲会が26演題発表



賞状と記念品を手にする土屋副室長（右は司会を務めた名徳倫明・大阪大谷大学薬学部薬学科実践医療薬学講座特任教授）



第3回グランプリを獲得した「食欲を取り(鶏)戻すごちそう薬膳」

同コンテストは、患者さんの健康を支える病院食の質向上を目的として2023年にスタート。第一次審査を通過した応募作品のなかから、JSPEN会員の投票によって審査が行われる。公平性担保のため病院名は伏せて審査する。

第3回のテーマは「患者さんに人気のメニュー！ 笑顔をつくる物語〜」。武蔵野病院が考案したのは「食欲を取り(鶏)戻すごちそう薬膳」と名付けた献立で、「しらすと生姜の混ぜごはん」「中華スープ」「油淋鶏」、

「たまごとトマトの炒め物」、「茄子の中華和え」、「台湾カステラ」で構成する彩りも鮮やかなメニューだ。

土屋副室長は「とても光栄です。院内では患者さんを対象とした嗜好調査によって、日頃から提供する料理に対する評価を受けていますが、今回のコンテストのような外部の目による客観的評価も大変貴重です。栄養価が十分であるのは大前提で、そのうえで患者さんにいかに召し上がっていただくか（喫食率の向上）、どう喜んでいただく

かを念頭に、調理師や栄養士とともにメニューを開発しています。今後も特色ある取り組みを行い、一目置かれる病院としての地位を確立したい」と抱負を語る。

グランプリ講演で土屋副室長は食欲不振に苦しむ患者さんのために、「ひと口でも食べたい」と思える工夫が必要と考え、見た目・香り・食感を重視した「食欲増進のための薬膳」を考案したと説明。薬膳の基本的な考え方である「五味調和」を解説したうえで、「五感に寄り添う『食のデザイン』で心を動かすことが大切」と強調。一つひとつの料理の工夫点を紹介した。

漢方は支持療法の選択肢

第41回JSPEN学術集会で徳洲会グループはグランプリ講演に加え、ワークショップや口演、ポスターの各セッションで、計26演題の発表を行った。一部を紹介する。

ワークショップでは岸和田徳洲会病院（大阪府）の村山敦・歯科口腔外科副部長が「E-learningシステムを用いたNST勉強会、その現状と問題点」をテーマに講演。JSPEN認定のNST（栄養サポートチーム）稼働施設では全職員向けのNST勉強会の定期的な実施が要件となっており、同院はコロナ禍後、E-learningシステムで実施している。

受講率や実施後のアンケート結果を紹介したうえで「勉強会のテーマや内容について受講者からの評価は、おおむね良好でした。

一方、E-learning導入によって参加職種は増えてきましたが、全体の大幅な受講率上昇にはつな

がりませんでした。アンケート結果から、所要時間は1回20分を超えないようにすることが、受講者の負担軽減につながると考えられます」とまとめた。

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の伊藤慎吾・外科部長は「がんサポーターケアにおける漢方と栄養の協調戦略」をテーマに口演。伊藤部長は、がんサポーターケア学会漢方部会の部会員として、『がんサポーターケアのための漢方活用ガイド改訂2版』（南山堂刊、5,500円、4月発行）のため、改訂作業に尽力した。

口演では悪性疾患に対する漢方のエビデンス（科学的根拠）などを解説。「がん支持療法としての漢方には『1剤で複数の症状に対する効果が期待できる』、『薬価が安い』、『倦怠感、食欲低下、末梢神経障害などに対するエビデンスが出てきている』、『重篤な副作用が少ない』といったメリットがあり、患者

さんのQOL（生活の質）を支える選択肢になります」と呼びかけた。

仙台徳洲会病院の神賀貴大・外科部長は「StageⅣ胃がん患者の予後予測因子としてのCRP-albumin-lymphocyte index（CALLY index）の有用性の検討」をテーマに口演。CALLY indexはアルブミン値、総リンパ球数、炎症マーカーのCRPを用いて算出する指標。

切除可能な胃がんの独立した予後予測因子になるという報告があるが、StageⅣ胃がんでは報告がないため、福島県内のがん診療連携拠点病院9施設による多施設共同のコホート研究（疾病の要因と発症の関連を調べるための観察的研究）のデータを用いて検討を行った。「CALLY index 1未満の群は、1以上の群と比べて予後不良であると有意差が出たため、独立した予後予測因子であると言えます」と結んだ。

ハール湘南鎌倉病院部長

英国・家庭医の経験生かし若手育成

湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の若手医師や総合診療医の育成体制にさらに厚みが増した。英国で17年間、GP（General Practitioner＝家庭医）として活動してきたクレア・ハール部長が1月に着任、外来や病棟回診、カンファレンスなど、さまざまな機会を通じ、研修医・専攻医など若手医師や総合診療科医師への指導、ネイティブならではの医療特有の英語表現に関する情報提供などに取り組んでいる。

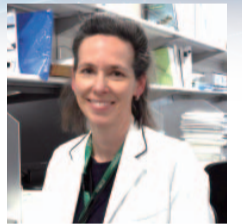
ハール部長は大学時代に2カ月間、京都に滞在、卒業後、米国でのMBA（経営学修士）取得を経て、大手コンサル会社のマッキンゼー・アンド・カンパニーやネスレの日本支社に勤務。通算5年ほど日本に在住し日本語も堪能だ。2003年に英国医師免許を取得した。

「GP診療所を17年間運営し、後進を育成しながら患者さんのために働いてきました。これまでの経験を生かし、親しみの深い日本の医療に貢献する新しいチャレンジをしたいと思い、当院に入職しました」（ハール部長）。日本での活動拠点をリサーチする過程で、「徳洲会グループ総合診療医育成プロジェクト」のWEBサイトにたどり着き、徳洲会の活動に引かれたのが入職のきっかけだという。

総合診療医スキルアップにも寄与

取材で訪れた日は午前中に総合診療科の外来で、研修医や専攻医（総合診療科）から、併存疾患を有する皮疹や腹部腫瘍、多発筋痛症などの診断や診療方針について相談を受け、実践的な知見をもとにアドバイス。研修医教育に尽力している医療法人徳洲会の八重樫牧人・教育顧問（医師）とコラボレーションして手厚く指導を行った。午後からは内科・ER（救急外来）合同カンファレンスに出席するなど、同院スタッフと交流を図りながら旺盛に活動。

総合診療科の瀬戸雅美部長は「GPは守備範囲の広さが特徴です。日本と英国の医療の良いところを合わせて、より良い医療を患者さんに提供できればと考えています」、八重樫・教育顧問は「総合診療」という医療分野に関しては、GP制度のある英国が日本よりも先に進んでいます。ぜひ英国での経験を日本の医療に生かしてほしい」と期待を寄せている。



「これまでの経験を生かし、日本の医療に貢献したい」とハール部長



電子カルテを見ながら診療方針の相談に乗るハール部長（右から2人目）。その右が八重樫・教育顧問、左端が瀬戸部長

江口・宇治病院事務次長

公衆衛生事業功労者表彰を受賞

宇治徳洲会病院（京都府）の江口光徳・事務次長（臨床検査技師、細胞検査士）は、令和7年度公衆衛生事業功労者表彰を受けた。同表彰は一般財団法人日本公衆衛生協会が主催し、長年にわたり公衆衛生の向上に顕著な功績のあった個人や団体に贈られる。

江口・事務次長は約18年間、京都府で子宮頸がん検診の普及・啓発活動に従事してきた。

京都府臨床検査技師会や京都府細胞検査士会の会長・役員を歴任するなか、子宮頸がん検診の国内受診率が国際的に見て低い現状を打破するため、イベントの企画や講演活動を精力的に実施。毎年4月9日の「子宮の日」を中心に、ショッピングモールなどでのリーフレット配布や市民向けのレクチャーを行い、受診の重要性を訴え続けた。

今回の受賞に対し、江口・事務次長は「地道な活動を認めていただき光栄です。これからも受診率向上に尽力していきたいと思えますし、その励みになりました」と笑顔。今後は、30歳以上の女性に対するHPV（ヒトパピローマウイルス）遺伝子検査の導入など、新しい検診体制の周知にも力を入れる考え。「子宮頸がんで亡くなる人をひとりでも減らしたい」と、さらなる普及活動に意欲を燃やす。



「これからも受診率向上に尽力していきたい」と江口・事務次長

子宮頸がん検診の啓発に尽力